

## 名古屋城石垣調査の現状と課題

—天守台周辺石垣調査を中心に—

村木 誠

### はじめに

平成31年4月に開設された名古屋城調査研究センターは、名古屋城に関連する文化財を広く調査研究することを目的としている。中でも、各種の整備事業が進む特別史跡名古屋城跡において、これまで重要性を指摘されながらも不十分なままであった石垣についての調査研究を行うことは大きな目標の一つである。

現在、本市が進める天守閣整備事業に絡んで、天守台石垣の調査が注目を集めている。天守閣の木造復元に先立つ天守台石垣の現況把握、それに基づいた保存の方針などについて不十分さが指摘され、天守閣木造復元の手続きを進めることができず、木造天守閣の竣工時期を見直さざるを得ないという事態となっている。調査を担当している本センターも、整備事業と無関係ではいられないが、一方で、整備事業の進捗とは一線を画し、適切な調査を行う、という姿勢は持ち続けていく必要がある。

本稿では、話題が先行している天守台石垣の調査の概要を整理した後、今後どのように調査研究を進めるかの方針を示したいと思う。

それにあたって、天守台石垣を名古屋城の石垣全体の中に位置付けて考えるべく、名古屋城の石垣調査の現状と課題を整理し、その調査研究などの進め方を議論する(註1)。そうすることにより、天守台石垣の調査研究の進め方も明確となろう。

### 1 天守台周辺石垣の調査

天守台周辺石垣については、本市が計画している天守閣整備事業に先立ち、現況把握のための調査を行ってきた。平成29年から開始したこの調査は、測量調査、現況調査(註2)、大天守台周辺の発掘調査などからなる基本調査に加え、レーザー測量による三次元点群データの作成、天守台石垣に足場をかけての石材調査、劣化度調査などからなる詳細調査を平成31年3月まで行った(表1)。これらの調査の成果に基づいて、天守台石垣の保存方針を整理し、天守閣整備事業に備えることとしており、当初は基本調査のみを計画していたが、平成28年に熊本地震が発生し、熊本城の石垣にも被害が発生したことなどを受け、詳細調査を追加的に行うこととしたものである。

発掘調査としては、29年度に大天守台の根石や内堀の堆積状況を確認するための調査、30年度に小天守台石垣の根石調査を行った(図1)。

これらの調査成果に基づいて、天守台周辺石垣の「変状」を、大天守台北面(U61)(註3)の孕み出しや大天守台の西面(U60)や東面(U62)に顕著な築石の被熱による劣化など10点に整理したうえで、その対処方法などをまとめ、天守台石垣の保存の基本的な考え方とした。これが、本市が平成31年3月にまとめた「天守台石垣の保存方針」であるが、有識者からは、調査が不十分であることなどを指摘されている。

こうした調査成果の取りまとめは、時間的な制

調査種別	調査内容	具体的な方法
石垣測量	(1) 石垣立面図作成	石垣の立面図を作成
	(2) 石垣縦横断面図作成	石垣の縦横断面図をそれぞれ作成
	(3) 石垣平面図作成	石垣平面図を作成
	(4) 石垣オルソ作成	オルソ（正射写真）を作成
	(5) 石垣三次元点群データ作成	三次元レーザースキャナにより、三次元のデータ作成
	(6) 可視化図作成	孕み出しの量等を可視化した段彩図を作成
石垣現況調査	石垣現況（健全性）調査	孕み出しや間詰石の欠落など、石垣の現況を目視により確認
	石垣調査票作成	石垣の面ごとに基本情報や劣化状況などの現況を記録したカード（いわゆる石垣カルテに類するもの）を作成
	石材調査	一石ごとに石種、加工状況などを調査
	石材劣化度調査	一石ごとの劣化状況を目視と打音により調査
	石垣レーダー探査	石垣面に5mごとに設定した測線でレーダー探査を行い、築石の背面状況を調べる
	ビデオスコープ調査	各築石の間にビデオスコープを差し込み、背面状況を確認
発掘調査		石垣の基底部（根石）を調べるための発掘調査、内堀堀底の堆積状況を確認するための発掘調査。あわせて、堀底の状況を調べるためのレーダー探査を実施。
モニタリング		石垣の変動（動き）を観測
史実調査		石垣の歴史的経緯について文献、写真などを調査

表1 天守台周辺石垣調査一覧

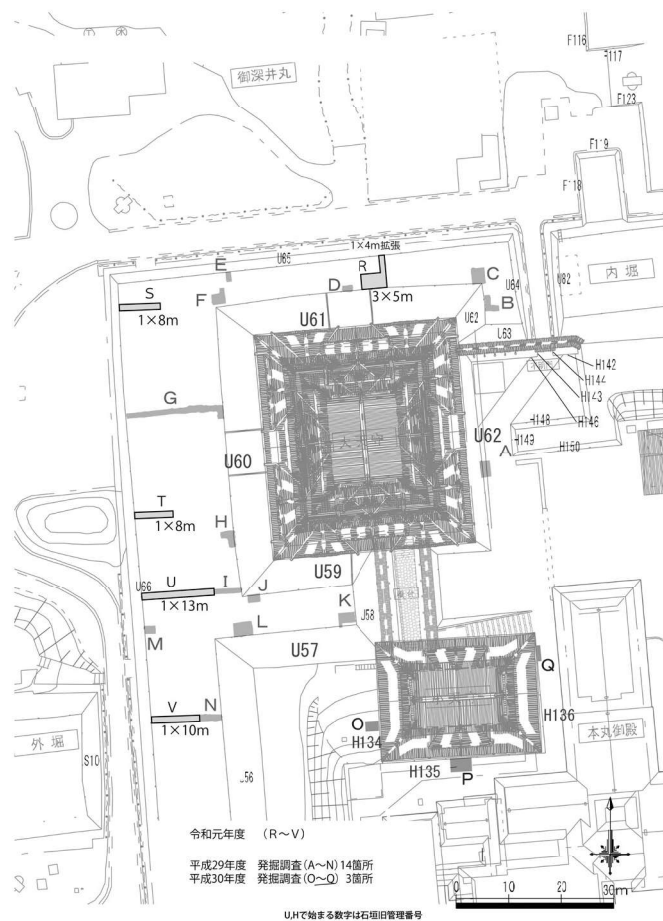


図1 天守台周辺石垣発掘調査位置図

約もあり、調査の成果を十分に咀嚼した上でのものとは言い難い。調査成果に基づき、「変状」の把握を行ったが、それが石垣の安定性にどのような影響を持つかという点について、十分に評価できていないことなど問題が残っていることは確かである。

こうした現状を受け、本市としては改めて調査成果を精査したうえで、更なる分析を行い、「天守台石垣の保存方針」を見直すこととしている。また、必要に応じて追加的な調査を行うこととしており、その一つとして、29年度に行った大天守台周辺の発掘調査の結果を受け、内堀内の堆積状況や内堀の外側石垣の根石の状況を確認するため、今年度、内堀の堀底のレーダー探査と発掘調査を実施した。

本センターとしては、整備のための手続きとは別に、こうした分析や追加調査の成果も含め、天守台石垣調査について、調査報告書を刊行する計画を立てている。その際には整備事業には直接関わらない点も含めて、学術的な成果を示す予定である。

すなわち、天守閣整備事業の手続きとしても学術報告としても、近年行った調査を改めてどのように検討していくかという方針を立て、計画的に進めていく事が重要である。

また、天守台石垣の調査は、名古屋城全体の石垣の調査と切り離せないものであるため、この機会をとらえ、天守台周辺石垣だけにとどまらず、名古屋城全体の石垣の調査のあゆみを整理し、城内石垣の調査研究について、今後とるべき方針を整理したいと思う。それにより、おのずと天守台石垣の調査についての今後の考え方も整理できよう。

## 2 名古屋城における石垣調査

以下では、天守台周辺石垣をひとまず離れ、名古屋城内全体の石垣調査についての議論を行う。

### 2-1 石垣の本質的価値と調査研究

城郭石垣の整備に際しての手引き『石垣整備のてびき』（文化庁2015）（以下『てびき』と表記）において、石垣の「本質的価値」は、「歴史の証拠」としての性質と「安定した構造体」としての性質の二つの側面から把握する必要があるとされている（pp.40-44）。そして、それを評価する属性・指標として「形態・意匠」「技術」「地域性」「時代性」「精神性」の5つによって評価することが述べられている。

石垣の「本質的価値」を評価するという用語は理解が難しいが、上記の5つの属性・指標について明らかにすることが、名古屋城における石垣の調査研究の当面の課題であることは間違いない。この5つの中でも、前の二つは当該石垣の観察に基づくものであるのに対し、後ろの三つは、それを踏まえて他との比較や解釈を伴うものであり、当面調査研究は、名古屋城の石垣の形態・意匠及び石垣築造技術の把握を目指すこととなる。

一方、石垣の「本質的価値」が、「歴史の証拠」としての性質と「安定した構造体」としての二つの側面から把握される必要があるとされるように、文化財としての調査研究に加えて、大規模な構造物として、適切に維持管理、保存整備していくための調査研究も行われる。『てびき』では、それに際して「日常的な観察」と「日常的な維持管理」によって得た情報を踏まえ、さらなる調査研究により収集した情報も含め、「石垣カルテ」

として系統的に整理していくプロセスが述べられている (p.69)。整備や管理においても、日常的な観察と調査研究がなされるのであり、それは「歴史の証拠」としての石垣の調査研究と明確に区別できるものではない。そのため、調査の目的によって区別せず、石垣の現況を把握するための調査研究を広く考えることにする。

また、石垣の調査研究として、石垣そのものだけでなく、歴史資料も対象となる。本センターでは、これまで名古屋城には不在であった歴史担当の学芸員も配置し、石垣についても総合的な研究を進めることを目指している。本紀要はそうした最初の試みであり、今後長期的に取り組むべき課題であるが、本稿では、踏み込んだ議論はできないため、文献資料に基づいた石垣の調査研究については触れない。

## 2-2 名古屋城石垣の概況

名古屋城に関連する石垣として現時点で確認できるものは、三之丸地区を含む特別史跡の範囲内に加え、未告示となっている二之丸地区などにも存在する。名古屋城総合事務所では、これらの石垣に通番の石垣管理番号を与えており、おおむね次のような原則に従っている。把握した石垣の面ごとに1番からの通番を与え、番号の後に地区ごとに、本丸地区H、西之丸W、御深井丸O、二之丸地区N、三之丸Sの記号を与える。これにより、例えば本丸地区にある天守台は西面が009H、北面が010Hという番号が与えられている。こうして番号を与えた石垣面は365である(註4)。

一方で、天守台石垣では上記の管理番号を整理

する以前の石垣番号(旧番号)も用いられており、上述した009HはU60、010HはU61という番号が与えられている。また、大小天守台内部の穴蔵石垣については、近年まで管理番号を与えていなかったため、前述の天守台石垣調査の際に、新たに番号を与えている(穴蔵番号)。これらについても、上述の原則には従っていない。

今後の混乱の原因ともなりかねないが、すぐにはそれを整理することができないため、当面、天守台周辺に関しては、旧番号及び穴蔵番号を用いていかに得ない。こうした不徹底が、名古屋城における石垣調査・研究の現状を示しているといえるかもしれない。

## 2-3 名古屋城石垣調査の歴史

### a 名古屋城内石垣の調査

名古屋城における石垣調査は、基本的には整備修復事業に関連して行われてきた。整備修復事業については『特別史跡名古屋城跡 保存活用計画』(以下『保存活用計画』と表記)(pp.102-105)を基に、表2に整理した。それぞれの事業に伴って関連する調査が行われてきたため、調査が体系的に行われてきたとは言い難い。石垣の修復整備が継続的に行われるようになった昭和45年以降について概観しておく。

昭和45年の豪雨により、御深井丸北側石垣が崩壊した。それを受け、翌46年には、付近の石垣にも孕みがあり、危険であるとして、外堀の石垣を中心に、10「路線」において、孕みの状態を調べるための測量調査が行われた。この調査では、測量図を基に孕みの状態を検討したうえで、石垣の背面土における地山土と盛土の境界付近で孕み

年度	場所	調査研究	報告
昭和45年	御深井丸北側石垣	石材調査、勾配検討など	名古屋市1970
昭和46年	外堀及び内堀	測量調査、間詰石の検討、石垣基礎の確認	名古屋城管理事務所1971
昭和50年	塩蔵門跡（東側）		
昭和51～52年	不明門跡石垣		
昭和53～54年	本丸東一之門跡（東側）		
昭和55年	元御春屋門跡石垣		
昭和56年	東南隅櫓南二之丸境石垣		
昭和57～58年	本丸表一之門跡（北側）	測量調査	名古屋市教委他1985
昭和59～60年	本丸表一之門跡（南側）	測量調査	名古屋市教委他1985
昭和61～63年	塩蔵門跡（西側）石垣		
平成1～3年	本丸東一之門跡（西側）	測量調査・石材調査・背面土調査	名古屋市1992
平成4～5年	くるみ林・塩蔵構境石垣	測量調査、石材調査	名古屋市1994
平成5年		測量調査・現況調査	
平成6年	塩蔵構南面石垣		
平成6年	二之丸東二之門跡北側石垣	測量調査・現況調査・石垣背面調査・基礎調査・石材調査	名古屋市1997
平成7～8年	二之丸東二之門跡北側石垣・二之丸東面石垣	測量調査・現況調査・石垣背面調査・基礎調査・石材調査	名古屋市1997
平成9年	塩蔵構南面石垣		
平成10年	二之丸東一之門跡西面石垣	測量調査・石材調査・背面土調査	名古屋市1999
平成11年	二之丸東二之門跡石垣	測量調査・石材調査・背面土調査	名古屋市2000
平成12～13年	不明門北東石垣	測量調査・石材調査・背面土調査	名古屋市2002
平成14年～	本丸搦手馬出周辺石垣	測量調査・石材調査・発掘調査（背面土・石垣基礎）	名古屋市教委2006

表2 名古屋城石垣調査一覧

が発生している可能性を示している。また、太平洋戦争で焼けた石の強度分析、間詰石の観察、石垣基礎の調査を行っている。更に、石垣の基礎に関しては、本丸表二の門北側の内堀内で、地表下3mの地点で、胴木が確認されている。どのような基準で調査地点が選定されたかはわからないが、城内石垣の全体の中で優先度が高い地点が選定されているものと思われ、調査内容も石垣の修復整備に有用なものとなっている。

その後、この調査での所見を根拠としながら、城内各所で保存修復の工事が行われてきた。それぞれの地点で石垣の測量調査、石材の調査、解体に際して背面土の観察が行われており、保存修理報告書において結果が報告されている。

平成5年には、大小天守台を含む名古屋城内

18か所において、昭和46年の調査と同様な縦断面の測量と現況写真による調査が行われた。この調査の経緯や成果について不明な点が多いことは遺憾であるが、撮影された写真と簡略化された縦断面図からからなる報告書が残されている。この調査も参考にして、その後の石垣修復整備の計画が立案されたものと思われる。

昭和46年、平成5年の調査が、城内全体の現況を網羅的に把握したうえで行われたとは言えないであろうが、課題があると思われる地点をピックアップしたうえで、その地点の測量調査・現況調査を実施し、それに基づいて計画的に保存修復の処置を行う、その際には、立面図の作成などの測量調査、背面土の検討、石材調査を行う、という手順があったことがわかる。修復事業に伴う調

査では、「歴史の証拠」を記録するという点からの調査は、限られたものしか行われていない。

その後、平成14年から行われている搦手馬出周辺石垣については、文化財としての石垣に対する調査もより本格的に行われるようになった。こちらについては、現在進行中のため後述する。

なお、名古屋城全体の石垣についての研究としては、石材に施された刻印の詳細な研究が高田祐吉によって行われており（高田1989・1999）、前述の保存修復の際にも石材調査が行われ、刻印の記録がなされている。名古屋城の石垣について行われた研究としては先駆的なものである。

## b 天守台石垣の調査

名古屋城の天守閣は、昭和20年の空襲により焼失した。天守焼失の際には、天守台も火を受け、特に穴蔵石垣は倒壊する恐れもあったため、昭和27～31年の間に積み直しが行われた。また、その後の現天守閣の再建の際には、ケーソンの埋設に伴い穴蔵石垣の解体と積み直しが行われた。この再建工事に伴って、天守台石垣の外部上位に変形などが生じたため、その部分の積み直しが行われている。また、この際に築石背面にモルタルが注入された。

こうした積み直しに際しては、施工記録が残されておらず、どのような工事が行われたのか、不明な点が多いため、天守台石垣の現況把握の課題となっている。

現天守閣の再建後、天守台石垣についてほとんど調査は行われてこなかったが、平成23年度になって、「健全性調査」が行われた。平成22年度に実施した名古屋城整備課題調査の結果を受け、

天守閣整備に向け、基礎資料が無い天守台石垣の健全性についての調査を行ったものである（名古屋市2012）。

この際には、オルソ写真の撮影、測量に加え、

- 1、文献・史料による石垣構造の調査
- 2、目視及び打音調査による現況把握
- 3、天守台基礎地盤調査（既存のボーリングデータをもとに地盤構造を推定）
- 4、石垣健全性の評価

が行われている。

石垣に対する現地調査としては、「石垣全体の変状状況や個々の石材の状況を調査することによって、補修の要否や今後の維持管理方法について検討するための基本情報とする」ことを目的として、目視による観察と打音調査が行われた。足場等は設置されなかったため、観察にも限界があるほか、打音調査は手が届く範囲に限られている。

また、石垣の安定性を評価する手法についても検討が行われ、「専門家による目視調査結果に基づく経験的手法」に対し、「より客観的・定量的な安定性評価手法」として、孕み出し指数による手法と力学的な理論式による手法によって検討が行われている。

孕み出し指数による安定性の評価は、測量による断面図と、文献史料によって復元される標準勾配との比較によって孕み出し量を出し、孕み出し指数を導いている。その結果、小天守西U57と、大天守台北面U61、大天守台東面U62については、孕み出し指数（孕み出し量（cm）を石垣の全体高（m）で除して算出）が2を超えており、「やや不安定」と評価されている（註5）。

こうした現地調査と分析に基づいて、石垣各面

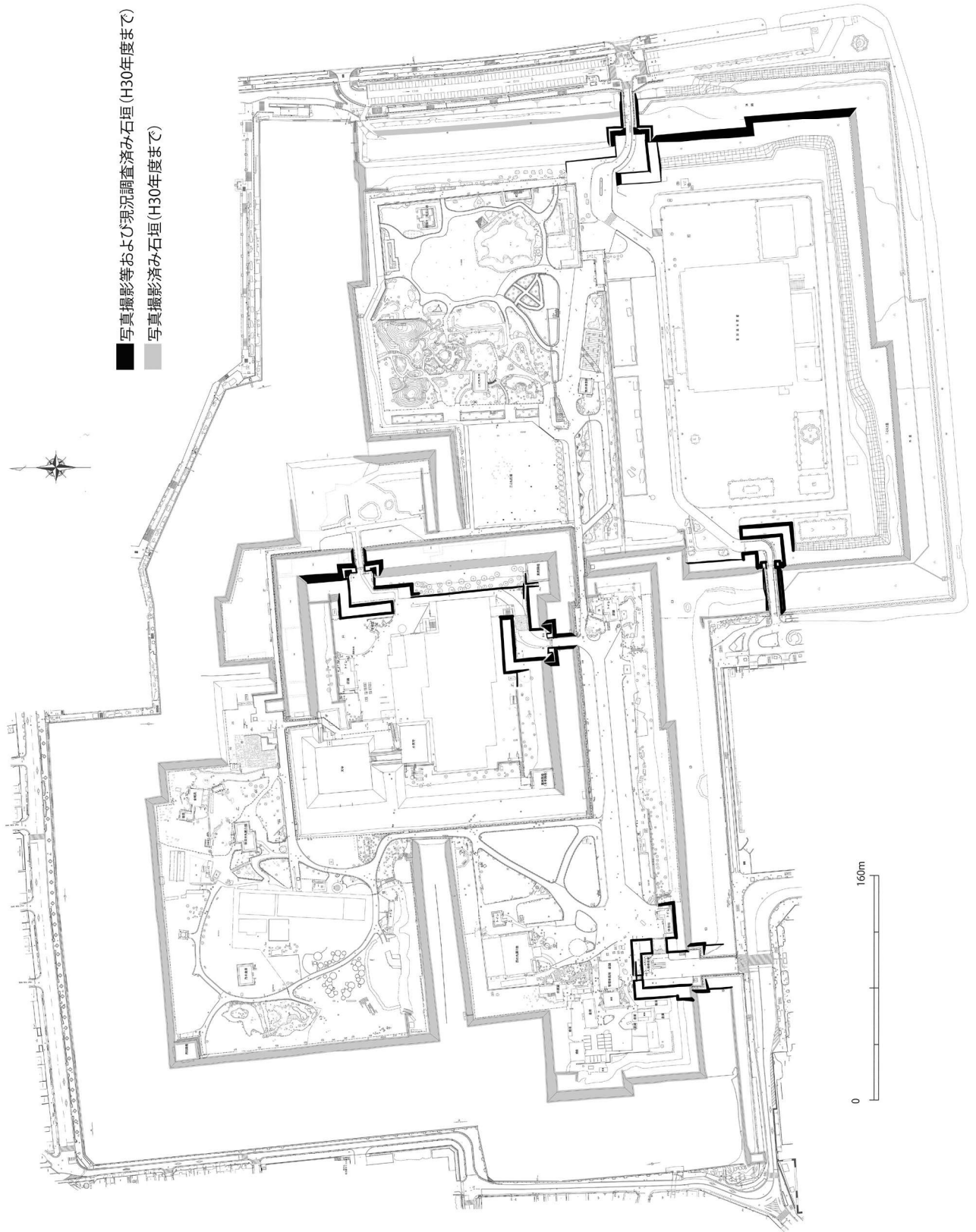


図2 名古屋城内石垣カルテ作成状況

の「安定性」が評価されており、小天守西側で、北向きに内堀に面する石垣 U57 と、大天守台北面 U61 については、孕み出しもあり、総合評価 D: 「石材の劣化とともに構造的な不安定化が顕著な石垣。日常点検に加えて継続したモニタリングが必要と考えられる」と判断されている。

また、石垣の安定性を考える材料として、現天守閣再建に先立って行われた 12 本のボーリングによる地盤調査の結果が分析されている。この際には、「内堀石垣、大天守北面、西面の高石垣はいずれも N 値 15 程度の南陽層の砂層に基盤をおいているものと推定される」とされ、また沖積層である南陽層上部のシルト層が石垣背面に出現する部分では、潜在的な弱点となり得るとされている。平成 23 年の段階で、U61 の孕み出し等に一定の判断が下されていることを確認しておきたい。

なお、この調査で指摘されている U61 の孕み出しは、明治 24 年に発生した濃尾地震の後に名古屋城内の建物の破損状況を報告した木子清敬の書簡（註 6）までは遡ることができる。これが、濃尾地震によるものか、あるいは別の原因によるのか決めかねるが、木子の指摘以来、関係者の間では問題として認識され続けていたことは間違いなく、大正 15 年には、孕み出し部分を根石まで掘り下げた上で、縦断面図が作成されている。

### 2-3 現在進行中の調査

ここでは現在名古屋城内で進行している調査についてまとめて述べる。

#### a 名古屋城内石垣カルテの作成

名古屋城においては、平成 29 年度より天守台

周辺を除くすべての石垣を対象として、石垣カルテの作成を行ってきている。まずはオルソ画像の作成を優先して行い、現時点では部分的ではあるが現況調査を行い、石垣カルテに整理している。計画としては今後数年のうちに全体の石垣カルテを作成する予定である。昨年度までの作成状況は図 2 に示した通りである。現況調査は来場者の通行が多いなど、優先度が高い所を中心に行っている。

石垣カルテの項目、体裁に関しては、『てびき』に示されたもの（pp.72-74）を基本として、有識者からの指導を受けて、名古屋城独自の項目を追加して作成をはじめた。記載項目のうち、石垣の編年などはまだ整理できておらず、「危険性」の判断も、全体像が見えていない現状では暫定的なものとならざるを得ず、全体像の把握が急がれる。作成は緒についたばかりであり、また、実際のカルテ作成を通じて必要な項目の追加や項目の修正を行う必要もあるため、今後、有識者の指導を受け、より良い形に修正していく必要がある。

#### b 本丸搦手馬出周辺石垣の整備と調査

個別の整備事業としては、本丸搦手馬出石垣周辺の整備を現在進めている。先述の通り、昭和 50 年以降、順次整備事業を進めてきたが、平成 14 年以降今日に至るまで、本丸搦手馬出周辺石垣の整備事業を行っている。水堀に面した北面及び東面に顕著な孕み出しが認められたため、解体して修復することとなったものである。

この整備事業は、それ以前の事業と比べると大規模なものであったため、文化財調査も本格的なものとなった。文化財調査のために、当初は、教



育委員会より職員が派遣され調査を監督し、その後、名古屋城に担当学芸員が配置された。

平成14年度より調査を開始し、その後石垣の解体を行ってきたが、開始から15年以上が経過した現在、解体を終えた状態である。

これまで、解体の計画に合わせ、測量調査、石垣上面および背面の発掘調査、石材の調査などを行ってきた。平成14年には石垣の解体に先立ち、現況調査として、測量や根石部の測量を行ったほか、石垣健全性調査としてレーダー探査、ポーリング調査、表面波探査を行っている。翌平成15年度には解体する櫓台や石垣の上面の遺構の残存状況を確認する発掘調査が行われている。その後、平成16年からは石垣の解体に合わせ、石垣の背面の発掘調査や石材調査を継続的に行っている。

こうした一連の調査の内、元御春屋門地点の調査については報告書が刊行されている(木村他2006)。この地点では、平成15年及び17年に、石垣前面の発掘調査、石垣解体に伴う背面土の調査、石材調査が行われた。石垣の根石を据え、前面を押さえる過程が検討されている他、解体に伴う背面土の調査では、地山と盛土の状況が示され、断面の状況から背面土を掘り込んで修復が数回行われたことが推測されている。

名古屋城において、石垣背面土を確実に調査し、記録を作成したのは、この本丸搦手馬出周辺石垣の調査が初めてと言ってよく、ここで得られた成果は、今後名古屋城の石垣について考えていく上で基準とすべきものである。

その他、石材調査として、肉眼観察による岩石種類の同定、石材の法量計測、配置状況、加工状況、刻印などを報告している。

多くの調査を行ったにも関わらず、搦手馬出周辺石垣の整備事業に関連する文化財調査の成果は、先述の報告以外では、有識者会議資料や外部検討会資料などで部分的に公表しているのみであり、大きな課題と認識している。

### 3 課題の整理

名古屋城の石垣について現在までの調査状況を整理した。それにより、ある程度課題も明確になったといえよう。以下で課題を整理する。

まずは、名古屋城の石垣の全体を把握し、管理するための基礎的な整理ができていないことが挙げられよう。石垣の管理番号の問題や、城内石垣の網羅的なカルテの作成など、調査研究の前提が整っていないと認めざるを得ない。

また、石垣の整備事業に伴うものが中心ではあるが、これまで相当量の調査が行われてきた。しかし、これらの成果の整理が十分ではないことも認めなければならない。本丸搦手馬出周辺の調査、天守台石垣の調査、いずれも調査結果を報告書として刊行するには至っていない。利用可能な形で情報が蓄積されていないという点だけでなく、他者による検証が果たされていないという点でも問題である。

更には、現在は調査によって情報を収集している段階であり、それらを生かした研究にまで至っていないことも課題である。未だ基礎的な情報収集の段階と言え、石垣の形態・意匠や築造技術といった面での研究を今後行っていく必要がある。そして、そうした研究を踏まえて更なる調査が行われるという循環を作らねばならない。

最後になるが、これまでこうした課題を多く残

してきた背景として、専門職員の組織体制の問題があることは明確である。これは本センターの充実によって取り組むべき課題である。

#### 4 今後の調査研究方針

本論は、冒頭に述べた通り、現在行っている天守台石垣周辺の調査やその分析をいかに進めていくかを出発点としている。しかし、天守台石垣も全体の石垣の一部であり、全体の石垣から切り離して議論できるものではなく、石垣全体の整理検討と合わせて進めていかねばならない。また、これまでまとめてきたように、これまでも調査は進めてきており、そうした成果の上に立って、現在の調査の分析を行う必要がある。以下では、今後の調査研究の進め方について、天守台石垣にも触れながら、全体の石垣についての調査研究についても合わせて述べていく

##### 4-1 名古屋城内石垣の現況把握

現在進めている石垣カルテの作成に際しては、最も基礎的な作業として、石垣管理番号の整理、石垣管理の方法の検討を始め、石垣調査研究の前提を整えることを急ぐ必要がある。

このような前提的な環境を整えた上で、まずは城内全体の石垣カルテを整備し、全体について一通りの現況把握を行いたい。

石垣カルテの作成計画を立て、計画的に作成していくというのは当然であるが、すべての石垣面についてカルテを作成するには、更に相当な時間がかかる。先行して作成しているオルソ画像をもとに、各面ごとの観察を書き込むといった、簡易な現況把握を城内全体について一通り行うことも

検討する必要がある。

一通りの状況把握に合わせ、城内石垣の形態・意匠、あるいは石垣築造の技術といったものを整理することで、城内石垣の編年的検討や石垣構築技術の実態を検討する研究についても進めていくことが可能になる。これらは先の整理の通り、石垣の「本質的価値」を評価するための属性であり、こうした段階になって初めて、名古屋城石垣全体についての研究を実証的に行うことができると言えるだろう。

石垣カルテの作成は、委託業者とともに担当学芸員が行っているが、今後数年にわたっての作成になるため、連続性・一貫性を確保するための体制を整えることも重要である。

カルテは、「追加調査」の成果を随時加えていくことにより、常に進化・発展させていくべきもの」との『てびき』の指摘(文化庁2015、p.69)を待つまでもなく、一通り作成することが目的ではなく、常に更新していくべきものである。日常的な観察を継続的に行うことができるような仕組みを作っていかなければならない。

##### 4-2 これまでの調査の整理検討

名古屋城においては、これまでの調査成果の整理、報告ができていないことを課題として挙げた。今後新たな調査を行う必要も出てくるであろうが、そのためにもこれまでの調査成果を整理し、報告書を作成する事は不可欠である。

##### <天守台周辺石垣>

平成29年度以降行っている天守台周辺石垣の調査は、時間的に限られた中に、多量の調査を詰め込んだという感が否めず、調査ごとの調査成果

は得られているものの、その総合的な検討、あるいは学術的な検討には不十分な点がある。また、天守閣の整備事業に関連して行われているため、時間的な制約のある中、調査の成果も、有識者会議の資料などに掲載されて公表されるというイレギュラーな形となっている。まずは文化財調査の成果を適切に報告することから始めていきたい。その際には、平成23年度に行った健全性調査の結果や、過去に行ったボーリングによる地盤調査の結果も合わせて検討する必要がある。

天守台石垣の現況の中でも、懸案の一つとなっている大天守台北面 U61 の孕み出しに関しては、その現況を把握することに加え、これまでの経年的な変化の検討や地盤調査の結果などとも合わせ、その原因について考えていく必要がある。

天守台に関しては、「宝暦の大修理」関係の資料に代表されるように、各種の歴史資料が残されている。本紀要に掲載した各論考が示す通り、すでに取組みを始めているところであり、今後も着実に進めていきたい。そのような石垣についての総合的な研究を行うことで調査研究センターが設立された意義も明確になるものと思われる（註7）。

#### <本丸搦手馬出周辺石垣の調査>

搦手馬出周辺石垣については、事業の開始から15年以上が経過し、その期間が極めて長くなっている。積み直しの計画を早急に具体化する必要がある。そして、積み直しに際しては、復元する勾配の問題や背面土をどうするかという、過去の調査成果の分析が不可欠な問題も多い。現時点では、こうした調査成果の整理、分析、報告書の刊行が進んでいない。調査全体の正式な報告はすぐには難しいが、概要報告など、調査成果の共有化

を早急に考えたい。

また前述の通り、昭和45年以降、体系的とは言い難いものの、優先度が高い地点を選び、基本的な調査を行ったうえで修復に進むという手順をとり整備事業を進めてきた。しかし、本丸搦手馬出周辺石垣の整備事業の開始以降、それ以外の石垣の保存修復の取組みが進んでいない。その点でも、この保存修復事業の目途を付けた上、『保存活用計画』で示したように、城内全体石垣の保存修復の考え方の整理に進んでいきたい。

#### 4-3 調査研究センターの今後

名古屋城調査研究センターは、これまで不十分との指摘があった、文化財の総合的な調査研究に取り組むために設立された。しかし、調査研究センターの設立がすぐに調査研究能力の向上にはつながらず、現時点では、増員された学芸員の能力と経験の向上に努めているところである。

調査研究センターが実際に機能するまでに時間がかかることは予想できたところであるが、内部での指導育成にも限界があるため、積極的に外部での研修に参加し、先進的な調査研究、保存管理、活用を行っている関係機関から学ぶ機会を設けたいと考えている。また、これまでの調査成果を整理し、報告書としてまとめていく実務の過程を経験することで、職員の経験と能力の向上を果たしたい。

こうした状況ではあるものの、学芸員の人数が増えた事で可能となることも多い。日常的な石垣の観察、基礎的な調査等、継続的に行うことができる仕組みを確立することが重要であると認識している。

調査研究センターが開設されたことには、名古屋城内各所で進む整備事業を円滑に進めるためという背景がある。適切な整備事業を円滑に進め、特別史跡名古屋城跡の保存・活用に資すること、その史跡としての価値の理解促進につなげていく事は重要なことである。しかしながら、学術的に適切な調査なしに整備事業が成り立たないことは身をもって学習したところである。本来調査研究は整備の目的のためだけに行われるのではなく、より幅広い目的をもって行われるべきであることを肝に銘じ、多様な調査研究に積極的に取り組んでいきたい。

### まとめにかえて

本稿では、近年行ってきた天守台周辺石垣の調査の現状を示すことから始めて、今後の方向性を示すことを目的とした。天守台石垣の理解のためには名古屋城全体の石垣についての調査研究が必要であるとの理解のもと、全体の状況も合わせて検討した。一見すると遠回りのようであるが、基礎を整え、調査成果を分析し、報告するという着実な調査研究こそが求められているはずであり、本センターが行うべきことであると思う。天守台周辺石垣もその例外ではない。

本稿は、普段から特別史跡名古屋城内の石垣調査についてご指導を頂いている、全体整備検討会議石垣部会の北垣聰一郎、赤羽一郎、千田嘉博、宮武正登、西形達明の各先生からのご指導・ご助言を参考に、今後早急に取り組むべきことを整理したものである。また、天守台石垣の調査に際してご助言をお願いしている奥村信一、白石建の両

氏からも普段からご教示をいただいている。記して謝意を示したい。

なお本論にも上記の皆様からの指導助言を反映できるよう努めたが、正しく理解できていないとすれば、それはすべて筆者の責任である。

### 註

- (註1) 本稿は、天守台石垣を含む名古屋城跡におけるこれまでの石垣調査の概要を整理し、課題をまとめること、それに基づいて、調査研究センターにおける今後の石垣調査研究の方向性を示すことを目的とする。そのため、調査成果の具体的な検討については踏み込まないこととする。そうした議論は、それぞれの調査について、基礎的なデータを再度整理し、改めて正規の報告を行う中で示していくこととする。
- (註2) 天守台石垣の現況調査を整理したものを石垣カルテとしていたが、後述する名古屋城全体の石垣カルテとは調査内容、項目ともに大きな隔りがある。同じく石垣カルテと呼ぶのは混乱を招くとの有識者のご意見もあるため、石垣カルテとは呼ばないようにしたい。
- (註3) ここで用いる石垣番号は、後述するように、現在の統一された石垣管理番号とは異なるが、天守台石垣については、会議の資料などとして、すでに調査成果を外部に公表しているため、その番号を踏襲する。
- (註4) 名古屋城全体の石垣の管理という点では、不十分な点も多く、番号を与えたすべての石垣について状況が把握できているわけではない。また、管理番号についても、付け替え等に伴う整理の経緯が確認できないものがある。早急な対応が必要である。
- (註5) この調査においても、石垣管理番号とも旧番号とも異なる石垣番号が与えられているが、混乱を助長するため敢えて記載しない。
- (註6) 「[名古屋城(名古屋離宮)震災復旧工事] 堤内匠頭宛木子清敬書簡」明治25年9月7日 東京都立中央図書館特別文庫 木子文庫所蔵
- (註7) 天守台石垣に関連し、宝暦の大修理の資料を整理し、現地の観察とも対応させた麓らによ

る一連の研究（（麓・加藤2009）以下、参考文献参照）は、先駆的なものであり、今後の調査研究の基本となるものである。

#### 参考文献

- 文化庁文化財部記念物課監修 2015 『石垣整備の手引き』 同成社
- 麓和善・加藤由香 2009 「名古屋城大天守宝暦大修理に関する史料と修理計画について」『日本建築学会計画系論文集』74巻638号
- 加藤由香・麓和善 2009 「名古屋城大天守宝暦大修理における仮設工事について」『日本建築学会計画系論文集』74巻644号
- 麓和善・加藤由香 2009 「名古屋城大天守宝暦大修理における石垣工事について」『日本建築学会計画系論文集』74巻645号
- 麓和善・加藤由香 2010 「名古屋城大天守宝暦大修理における本体上げ起こし修理について」『日本建築学会計画系論文集』75巻651号
- 麓和善・加藤由香 「名古屋城大天守宝暦大修理における各部修理について」『日本建築学会計画系論文集』75巻653号
- 木村有作他 2006 『特別史跡名古屋城跡 本丸搦手馬出石垣修復工事 発掘調査報告書 - 元御春屋門地点の調査』 名古屋市教育委員会
- 名古屋市 1970 『名古屋城石垣修理調査報告書』
- 名古屋市 1992 『特別史跡名古屋城跡 東一之門跡（西側）石垣保存修理工事報告書』
- 名古屋市 1994 『特別史跡名古屋城跡 くるみ林・塩蔵構境石垣保存修理工事報告書』
- 名古屋市 1997 『特別史跡名古屋城跡 二之丸旧東二之門北側・二之丸東面石垣保存修理工事報告書』
- 名古屋市 1999 『特別史跡名古屋城跡 二之丸東一之門跡石垣保存修理工事報告書 1998年度』
- 名古屋市 2000 『特別史跡名古屋城跡 二之丸東二之門跡石垣保存修理工事報告書』
- 名古屋市 2002 『特別史跡名古屋城跡 不明門北東石垣保存修理工事報告書』
- 名古屋市 2012 『名古屋城天守台石垣健全性評価報告書』
- 名古屋市 2018 『特別史跡名古屋城跡 保存活用計画』
- 名古屋市教育委員会他 1985 『特別史跡名古屋城跡 表一之門跡 石垣保存修理工事報告書』
- 名古屋市教育委員会 2006 『特別史跡名古屋城跡

- 本丸搦手馬出石垣修復工事発掘調査報告書 - 元御春屋門地点の調査 - 』
- 名古屋城管理事務所 1971 『名古屋城石垣調査報告書』
- 高田祐吉 1989 『特別史跡名古屋城天守台石垣の刻紋』財団法人名古屋城振興協会
- 高田祐吉 1999 『名古屋城石垣の刻紋』続・名古屋城叢書2 財団法人名古屋城振興協会